

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°21 ドメーヌ・ディディエ・モンショヴェ

生産地方：ブルゴーニュ

新着ワイン4種類♪

AC クレマン・ド・ブルゴーニュ 2019 (白泡)

2019 VT は、モンショヴェが最後に収穫したクレマン・ド・ブルゴーニュ！醸造は全てボリス・シャンピイが行っている。モンショヴェは酸を補うために必ず 20%アリゴテをアッサンブラージュしていたが、シャンパーニュのブラン・ド・ブランが好きなボリスは、アリゴテを使わず 100%シャルドネで仕込んでいる。また、酸味はドザージュを減らすことによって十分補えるということで、3g/L とモンショヴェの半分に抑えている。出来上がったワインは、泡立ちに勢いがあり、シャープで超スレンダーな味わいに仕上がっている！ドザージュを減らすことによって懸念されていた苦みやエグミはほとんどなく、シャープなキレと滋味深いミネラルとのバランスが非常にマッチしている！ボリスはシャンパーニュのブラン・ド・ブランをイメージして仕込んだと言うが、完成度がかかなり高い！

AC オート・コート・ド・ボーヌ 2018 (白)

2018年のオート・コート・ド・ボーヌ白は、実質モンショヴェの最後のヴィンテージ！2018年はちょうど1年前にリリースしているが、このヴィンテージが最後ということで再入荷を決定！前回のリリースからちょうど1年を経たワインは、果実味がさらに削ぎ落されエキスの透明感が増している！ピオディナミの畑で健全に育ったブドウはミネラルが Salin (塩気のある)」とディディエはよく言うが、味わいはまさに塩気のあるピュアなミネラルを感じる、まるでダシのような上品な旨味がスツと口の中に溶け込むようなワインに進化している！ブルゴーニュでいち早く取り入れた、1984年から続くピオディナミの集大成がこのワインに詰まっている！五臓六腑に染み入るモンショヴェ最後のオート・コート・ド・ボーヌ ブランをぜひ堪能していただきたい！

AC オート・コート・ド・ボーヌ 2018 (赤)

2018年のオート・コート・ド・ボーヌ赤も、モンショヴェの最後のヴィンテージ！オート・コート・ド・ボーヌ白同様に、ヴィンテージが最後ということで再入荷を決定！前回リリースした時は、果実味に太陽を感じるふくよかさが目立っていたが、瓶熟1年を経た今回のワインは、厚い果実のkokoroに隠れていた骨太な酸とミネラルが表に現れ、よりヴィヴィッドで一体感のあるワインに進化している！ディディエの言う通り、長年ピオディナミで育てられたポテンシャルのあるブドウが暑い年に当たった時は、リリースしたてをすぐに飲むのではなく1～2年寝かせてから飲んだ方が良いという、まさに彼のアドバイスがそのまま体現されたワンランク上の風格を備えたワインに生まれ変わっている！また、思っていた以上に酸の重心が低いので、長期熟成にも耐えそう！

AC ボーヌ・1er クリュ オー・クシュリア 2018 (赤)

2018年は、豊作だった2017年よりも収量の多い当たり年だった。また、収穫日は9月3日とドメーヌのオー・クシュリアの中で一番早かった。2018年に新たに0.9ha畑を増やした上に豊作だったので、仕込み樽は40樽にも及んだ。出来上がったワインは、収量が多くても日照量に恵まれたので赤い果実に上品なkokoroがある！前回の2017年よりもストラクチャーがあり、鉱物的なミネラルとほろ苦いタンニンが骨格を支える！ボリス曰く、今飲むのであればジビエ料理と合わせることをおススメ。だが、当たり年なので、できれば味わいがこなれるまで最低5年は寝かせてほしいとのこと！

ミレジム情報 当主「ディディエ・モンショヴェ」のコメント

2018年は、2017年同様ブドウが早熟で収量にも恵まれた。冬のスタートは雨が多く、また2月に寒波があり久しぶりに冬らしかった。4月終わりに寒波が降り、気温が0℃まで下がる霜のリスクがあり、さらに5月には何度か雹のリスクを伴う雷雨が何度か立て続けに降ったが、畑は無傷だった。開花は順調。病気もミルデューが葉に

少し繁殖したがすぐ収まり、全体的に赤も白も豊作が期待された。6月に入り天候は一転、猛暑と雨の降らない日が収穫まで続いた。幸い、冬と春に降った雨のストックがあったおかげでブドウは日照りの心配が全くなかった。収穫は、前年同様例年よりも2～3週間早く、果汁をたっぷりと含んだ健全なブドウを取り入れることができた。

2019年は、春の遅霜と夏の日照りが収量に影響した厳しい年だった。冬のスタートは比較的暖かく前年の12月に降った雨のおかげで十分畑も潤い、萌芽も早かった。だが、4月4日、5日に霜が降り標高の高いオート・コートは2割ほどの被害に遭った。一方で、ポーヌやポマールの丘の中腹のブドウはほとんど霜の被害に遭わず、霜の被害に遭った区画と無かった区画でブドウの成長スピードに大きな差が生じた。4月中旬から気温は通常に戻り、寒波で遅れたブドウのサイクルも徐々に回復傾向にあったが、6月に入ると再び気温が低く不安定な天候が続いた。ちょうど開花の時期も重なったので、クレマンのシャルドネなどは霜よりもむしろ花ぶるいや結実不良により収量が落ちてしまった。だが、6月中旬から夏日が回復。6月下旬と7月下旬には、逆に40℃を越す歴史的な猛暑を記録した。遅れていたブドウの成長も驚くほど早く回復していったが、一方で、水不足が8月終わりまで続いた。一時は日照りの中での収穫になると悲観的にもなったが、9月に入りポーヌ地方は収穫直前に雨が降ったおかげで水不足は一気に解消され、無事バランスの取れた高品質なブドウを収穫することができた。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

今年6月、最後のワインの情報取りと試飲のためにモンショヴェエのカーヴを訪問した。ディディエはもうすでに引退し、ドメーヌは完全にボリス・シャンピイに移行されているため、ボリスが快く訪問を受け入れてくれた。

ワインの試飲をしながら話を進めていくと、どうしても話題は今年4月の大規模な霜の被害に引っ張られていく。それだけ2021年の霜はブルゴーニュにとって大きなインパクトを残したようだ。ボリスが言うには、特に今回の霜はブルジョワ泣かせの霜だったそうだ。つまり、被害はコート・ドールの丘の中腹、1級やグラン・クリュと、通常は畑の位置や傾斜的に一番被害の少ないはずのゾーンに集中し、反対に寒波が降りるといつも霜の被害に遭う標高の高いオート・コートや平地の畑は被害が少なかったそうだ。「ロウソクを焚き完璧を期したロマネ・コンティも今年は霜の被害に遭っている。今年の霜の厄介なところは、天気予報が霜を予報し、各ドメーヌが一斉にロウソクを焚くなどの処置を施したのだが、最も気温の低かった4月6日～8日は、霜と同時に雪も降り焚いていたロウソクの火を雪が消してしまい、そこに寒風が帯のように丘の中腹を流れたため多くの被害をもたらしてしまった」とボリスが詳細を説明してくれた。彼が言うには、オート・コートは幸い寒風の流れがなかったことと芽の出るタイミングが1級、グラン・クリュよりも遅かったおかげで、甚大な被害にまで至らなかったようだ。



「ヨシ、これを見て」と彼は携帯に収めた写真を私に数枚見せてくれた。彼が見せてくれたのは、4月25日に撮ったヴィーニュ・フランシュの畑の写真だった。これはボリス（旧モンショヴェエ）のポーヌ 1er クリュ・ヴィーニュ・フランシュの写真（写真①）。4月終わりにしては成長が遅いが、とりあえずブドウの芽の出ていることが確認できる。畑に点々と置かれている白い缶はロウソク。実は、この日の早朝、天気予報の予報はなかったが気温がマイナス3℃まで下がり霜が降りたのだそうだ。「我々は、この日霜を察知し、タイミング良くロウソクを焚いたおかげで霜の被害を免れることができた！」と誇らしげに語ってくれた。どうやら彼は今年、携帯で気温をリアルタイムに確認できるセンサーを各畑に設置し、気温がゼロを下回りそうになると携帯がアラームで知らせてくれるアプリを活用したそうだ。「夜中にアラームが突然鳴り出したが、天気予報で霜の予報がなかったので最初はセンサーの調子がおかしいのかと思った。実際に畑に向かい気温を測ると、確かにゼロ付近まで冷え込んでいた」急いでボリスは畑責任者に電話し、責任者と一緒に夜中中かけてロウソクを置き、早朝前に一斉に火をつけた。結果、朝5時の気温はマイナス3℃。一方、ロウソクを焚いた畑の気温はゼロ前後と辛うじて暖かい空気の対流を起こすことに成功したそうだ。

（写真①）夜中中ロウソクを置き、霜から守った
ポーヌ 1er クリュ・ヴィーニュ・フランシュの畑



ちなみに、これは隣人のヴィーニュ・フランシュの畑（写真②）。ロウソクを焚いていないので、残念ながらしっかりと霜の被害に遭っている…。生産者から霜対策としてロウソクを焚くことは良く話では聞いていたが、実際に写真で見るとこれだけの違いがあるのかと驚かされる！「ボリスかなり仕事ができる～」写真を見ながら思わず唸ってしまった。彼は元レイ・ラトゥールのテクニカル・ディレクターやドメヌ・クロ・デ・ランブレイの管理人だっただけあってか、彼の情報分析力は本当に素晴らしい、のひと言！ぜひ彼のこれからの活躍に期待したいところだ！（2021.6.15.ドメヌ突撃訪問より）

（写真②）残念ながら霜の被害を受けてしまった隣人の畑

ディディエ・モンショヴェの応援を長らくいただき、誠にありがとうございました！



モンショヴェの引退により、今回のリリースをもって35年続いたドメヌの幕を下ろすこととなりました。今まで長くモンショヴェのワインを応援し、ご愛飲していただいた皆様、本当にありがとうございました。

まだビオディナミが世に知られていない黎明期の頃、それも革新を厭う閉鎖的なブルゴーニュの土地で、20歳の若者ディディエが僅か0.5haの畑からスタートさせたドメヌ・ディディエ・モンショヴェ。両親との確執などいくつもの困難を乗り越えながら、熱い信念に支えられ、絶えずビオディナミのフロントランナーとしてブルゴーニュのビオワインの礎を築いてきました。

そんな彼の集大成とも言えるワインが、今回のリリースをもって最後となります。

2021年秋、折しもモンショヴェが引退したこの時期に重ね合わせたように Bourgone Aujourd'hui という雑誌に、「ブルゴーニュのビオディナミを牽引した5人のパイオニア」という表題でドミニク・ドゥランやエマニエル・ジブローなどと並んでディディエ・モンショヴェを再評価する記事が掲載されました。そんな、ブルゴーニュのビオディナミを代表する偉大な造り手でありながら、いばることも気取ることもなく、親しみやすく、穏やかな人柄で、いつも友人のように我々に接してくれました。彼のつくるワインは、名うての生産者のように話題をさらうような派手やかさはないですが、彼の人柄の様に、どのワインも実直で後から心に染み入るような真っ直ぐさがあります。まさに今のヴァン・ナチュール界の初期の時代を牽引したワインでもあります。

彼の功績を改めて振り返っていただき、彼のフィナーレとなるワインを、もし手に取っていただけましたら幸いです。長らくの応援、本当にありがとうございました。